

岩瀬文庫コレクション

はいせきたまてづま 盃席玉手妻

(36—39) 3冊

江戸時代、遊びにも真剣に興じて上手に場を盛り上げられることが粋な大人の条件の一つでした。そのためさまざまな遊びのルールブックや酒席の座興のハウツー本などが刊行されています。本書もそのうちのひとつ、寛政11年(1799)年に離夫という人物(詳細は不明)によって刊行された、お座敷などで披露する手妻(手品)の指南書です。

上・中・下の3巻から成っており、まず上巻で手妻のいろいろ——手を触れずに煙管をくるくる回す技、徳利の口から水を噴き出させる技、



▶写真は「寫筆へ入り紐を結び封をするに、中なる人自由に抜け出す」という大技。お客の中に仕込んだ協力者と、2人掛かりで大脱出に挑みます。

たくさんの茶碗を一気に持ち上げる技、首を斬った雀を再び飛び去らせる技、紙を燃やしても焦げない技など——全部で33種類もの人を驚かせる技を紹介し、中・下巻でタネを図入りで解き明かしています。大方はトリックを用いた手品の類いですが、中には数学理論を応用した数当てや、空気圧や静電気などをうまく使った「おもしろ科学実験」のような技も含まれています。忘年会やクリスマス会をはじめ、何かと宴会の多いこの季節、余興のネタにお困りの方はぜひ岩瀬文庫へどうぞ。江戸時代仕込みの手妻など、いかがですか？

シリーズ 68 西尾の古と探る

佐久島古墳群

古墳時代終末期になると、古墳に埋葬される者は小さな集落単位の有力者にまで拡大し、古墳が密集して築かれました。面積1・76kmの佐久島では46基の古墳が全島域に分布し、昭和41年に、南山大学によって5基の古墳の石室実測と山の神塚古墳の発掘調査が行われました。

発掘調査された山の神塚古墳は直径約12mの円墳で、全長8・8mの擬似両袖式の横穴式石室は、玄室(奥室)が緩やかな胴張り形を呈する複室構造で、奥室・前室・羨道は立柱石によって区切られています。玄室内部には佐久石で造られた組み合わせ石棺を置き、その周囲には多くの須恵器、耳環1点、白玉1点が副葬されていました。築造時期は出土遺物によって7世紀後半と考えられます。

秋葉山一号墳は、奥壁が多

段積みであることから竪穴系横穴式石室と推定され、本古墳群で最も古いものです。その他の古墳はいずれも直径10m前後の小規模な円墳で、単室構造の横穴式石室を設けています。石垣一号墳、平地一号墳、平古三号墳の石室は、強い胴張り形を呈し、平地一号墳、平古三号墳では玄室と羨道が立柱石によって区切られています。また平古三号墳には佐久石の組み合わせ石棺が置かれていました。平古五号墳は玄室の長さが5mを超え、無袖式と推定されます。これらの古墳は7世紀代に築造されたと考えられます。平坦地がわずかな島に数多くの古墳が立地することは、三河湾を生活の拠点とし海上交通を支配した集団が存在し、後には「折島海部」となって天皇家に贄を献上したためと思われる。